

～総評：『危険だけど、安全な環境』をつくる取り組みへ～

2017.09.25

みどり病院院長 松井一樹

Q1こと『[医療の質]を測り改善する』取り組みは、2011年から開始しています。

昨年は、Q1指標の『サブ分析』（いくつかのデータを集めて要因）をつかんでいくことを提示しました。

2016年の特徴は、『各部署や委員会がそれぞれに独自指標を設定し、活動目標とリンクしたQ1活動を推進』、医療従事者は、どうしても「不十分さ」に目を取られる傾向があるため、今年からは、『職場を元気にする指標』をテーマに、日々の医療活動業務とリンクさせ、結果や活動目標の達成を実感する事で意欲を高める事で、患者様へのサービス向上に繋げる。』を新たに加えました。



現在、当院から発信されたQ1の取り組みは、法人各診療所・介護分野へと、活動が広がりつつあり。更に、電子カルテデータベースとのリンクにより、膨大なデータを瞬時に利用しQ1活動に繋げる取り組みが進んできました。

当院は、高齢者の多い地域（65歳以上36%、岐阜市は28%）に立地し、一人の方が、複数の疾病、複数の社会的課題を抱えて受診されます。ポリファーマシー（多くのお薬を内服）、身体の不自由、認知機能、お金や家族の事情、地域環境などなど、その課題は様々です。

医療においては、それらの課題とともに、疾患ガイドラインに基づいた迅速な判断、的確な治療方針が求められます。

例えば、入院された場合は、できるだけ早い回復、退院後も安心して生活できる状態への回復が望まれます。しかしながら、当院での入院患者さんの高齢化に伴い、基本的な日常生活動作の回復は、一筋縄ではいきません。退院に向けて生活を戻していくには、常に、ベッド上安静というわけにはいきません。より早い回復のためにはリハビリテーションを進め、身体を動かす必要があります。しかし、リハビリテーションを進め、身体を動かす事は、転倒や事故に発展するリスクを増加させる要因となります。私達は、そのリスクを早期に正確に把握し、予防策を行う事で、リスクを最小限に抑える必要があり、病院という、医療事故の可能性のある環境で、何か事が起こっても大事に至らない『危険だけど、安全な環境』を構築していくことが必須です。

『危険そうに見えますが、安全です。そのために〇〇を工夫しています。〇〇に取り組んでいます。』と言える職場をつくりたい。そのためには、各部門がコミュニケーションをとり、協力し合いながらの根拠に基づいた医療活動を行っていく必要があります。Q1活動では、その目標とする活動を活動内容と活動結果の両面から評価し、コミュニケーションツールとして活用する事で、職員の意識・意欲を向上させ、更なる質の向上に繋がります。

2016年は、各部門が奮闘し、全般的に、Q1の数値の向上が見られました。各指標を連関させ、サブ分析を進めましょう。今後は、アウトカム指標にも力を入れ、具体的成果を意識した取組として、データを振り返りながら、質向上を意識した取り組みを進めていきたいと思います。